



神戸市立千鳥が丘小学校の子供たちと

荒浜小学校の児童は、神戸の復興を目の当たりにして、20年後のふるさと荒浜の姿をそれぞれに思いがいていました。また、神戸の人々の心の温かさにふれ、「今後、またこのような災害が起きてしまったとき、どうしたら役に立つことができるのだろう」と考えている児童もいました。

3 地域を支える一人として

「神戸市を訪れた荒浜小学校6年生の作文」
平成二十七年、荒浜小学校の6年生は、神戸市で開かれた「小学校防災教育発表会」で、復興のために自分にできることを発表してきました。阪神・淡路大震災から二十年が過ぎた今、神戸はとてもきれいな街になり、わたしたちには、震災のあとを見つめることはできませんでした。仙台に帰ってから、わたしはもう一度阪神・淡路大震災のことを調べてみました。すると、崩壊したメリケン波止場の一部など、いくつかの震災遺構が残っていることを知りました。

東日本大震災のとき、わたしはまだ一年生でした。あの日に見た津波を思い出すと今でもこわくなりません。神戸の人たちの中にも同じような思いをした人がいるかもしれません。震災遺構は、わたしたちのように悲しい思いやつらい思いをした人たちの体験をむだにせず、未来に生かしてもらおうためのものです。仙台市では、わたしたちの荒浜小学校校舎が震災遺構として残されることになりました。奇跡の一本松のように有名ではないけれど、荒浜の町の人にとってはとても大切なものです。

いつか本当に復興した様子を神戸でお世話になった人たちにも見てもらいたいと思います。そのため、これからも自分にできることを考えていきたいと思っています。

「神戸市の現在の小学生の作文から」
やさしきを持つ（抜粋）

防災未来センターに行つて学んだことは、ボランティアの始まりは沖繩からの救援隊が阪神淡路大震災の時に来てくれたこと。それを見た避難者は「何かしなくちやいけない」と思つて、助け合いが始まったことを学びました。

もし、災害が起つたら、ゆずり合い、助け合いができるボランティアをすぐに進めていきたいです。「うばい合えばなくなる。」「分け合えば余る。」「この言葉を頭にしっかり入れこんで、真つ先にボランティアができる人になりたいと思いました。」

*** **

ぼくが防災の学習で学んだことは、長田区の被害が多かったこと、この真野小学校が避難所だったこと。先生からのお話で、「生きるか死ぬかの分かれ道に立った時、たとえ生きる確率が二十パーセントだったとしても必ず生きる方を選ばなアカン。」ことも知った。

ぼくは学校で学んだことや自分の感じたことをそのまま伝えたりして、震災の記憶を絶やさないようにならなりました。そして今のこの気持ち、震災でなくなつた方々を敬う気持ち、友情、絆をいつも持っていたい。

しんさい 震災を乗り越えて

神戸市では阪神・淡路大震災という大きな災害を経験し、力を合わせ復興をとげました。同じ震災を経験した仙台市の小学校との交流も進んでいます。私たちは、仙台の復興を願い、地域を支える一人としてこれから何を大切にしていけばよいでしょうか。

1 阪神・淡路大震災

1995（平成7）年1月17日、神戸市のある兵庫県南部で阪神・淡路大震災がありました。神戸の小学生も私たちと同じように恐ろしい思いをし、大変な苦勞をしました。



地震直後の阪神高速道路



震災の1年8か月後に全線開通

＜阪神・淡路大震災と東日本大震災の被害の比較＞ 2015（平成27）年9月現在

	死者(人)	行方不明者(人)	負傷者(人)
阪神・淡路大震災	6,432	3	43,792
東日本大震災	19,335	2,600	6,219

2 神戸と仙台の交流

阪神・淡路大震災から20年が経過し、神戸は、世界からたくさんの観光客が訪れるすばらしい街に復興しています。

冬休みが終わってから、荒浜小学校の6年生は神戸に行きました。神戸市で行われる「防災教育発表会」で、仙台の復興と自分たちの取り組みについて発表することと、震災以来、様々な支援を受け、交流を重ねてきた神戸の六甲アイランド小学校などを訪れるためでした。



防災教育発表会での発表の様子